

都道府県別賞一等

繋ぐ

和歌山県 有田市立有和中学校 三学年

藤田 紗奈

「生命保険」というものを聞いてはっと何かを思いつく人はどのくらいいるのだろう。言葉を知っている人はいても、その意味まで知っている人は少ないのではないか。

実際、私もそうだった。生命保険Ⅱ家族が亡くなったときにお金を受け取れる制度としか思っていなかった。しかし、ある出来事のおかげでその認識が変わった。

ある日の夕方、保険会社に勤める知り合いが家を訪ねてきた。その人は母と生命保険について話をしており、「医療保険」や「死亡保障」など知らない単語が会話の中で何回もでてきていた。そのときそばにいた私は『なんか難しいこと話してるなー』程度で聞き流していた。しかし、しきりにでてくる「万が一」という言葉がなぜか心に残った。

そしてそんなことを忘れかけた頃、私の大好きだった祖父がガンによって亡くなってしまった。ガンが分かり、半年間入院し五十八歳という若さでこの世を旅立った。まさか自分の祖父が病気になる、もう会えなくなるなんて思いもしなかった。これが、「万が一のこと」だと腑に落ちた気がした。祖父がいなくなると祖母はどうなるのだろうか。子供ながらすごく心配したのを今でも覚えている。しかし、祖母は強かった。皆に心配をかけないようにしているのか笑顔で私に接してくれた。そんな祖母は私の感情を読み取ってか、私に、「心配しないで。おじいちゃんが入っていた保険でなんとか生活していけるからね。」

と声をかけてくれた。そのとき私は思った。確かに保険は家族が亡くなったときにお金を受け取れる制度だが、遺された家族への最後の「贈り物」になるのではないかと。これからの生活のためのお金という「物」と、もし自分がいなくなったときも家族が生活していけるようにという「気持ち」。その両方が正真正銘最後に贈れる家族への「愛」なのではないか。

命あるものはいっつか必ず散っていく。だから、「万が一」の出来事は明日かもしれないし、はたまた、来週、来月、来年、何十年後先かもしれない。今を生きていることは奇跡で、幸せなことだ。ありふれたこの日をなにげなく過ごす平和な時間。大好きな時間。

生命保険に加入することは、そんな時間を過ごすきっかけになるのではないか。「万が一」を考え、家族とともに歩む未来を想像する。自分が亡き未来が訪れても、

第62回中学生作文コンクール

家族が最後の贈り物によって生活してくれる。想いのバトンが次から次へと受け継がれていく。自分がそのバトンを繋ぐ第一走者とならないか。生命保険に加入というスタートをきり、人生という長い道のりを全力で駆け抜け、次の走者に想いのバトンを繋ぐ。その想いのバトンには愛をこめて。